

体験教育、手塩にかける教育としての社会調査実習に関する一考察 — 多摩地域におけるコミュニティビジネスを対象として —

鷗 沢 由美子

I. はじめに

明星大学を設置運営する学校法人明星学苑の教育方針の第一に掲げられているのは、言うまでもなく「人格接触による手塩にかける教育」であり、第三に掲げられているのは「実践躬行の体験教育」である。本論では、筆者の所属する明星大学人文学部人間社会学科において、重要な科目と位置づけられる「社会調査実習」の中で筆者の担当授業を例にとり、どのような体験教育、手塩にかける教育が実践されているのかを検討し、その成果と課題、さらには今後の展望をみていくものである¹。

それでは、まず社会調査実習とはどのような科目なのだろうか。人間社会学科の軸となる学問である社会学分野では、社会調査をしてデータを得、分析、議論を進めていくことが重要な研究手法となっている。社会学関連分野では、一定のカリキュラムを修得したものに社会調査士の資格が付与されるが、社会調査実習は一連のカリキュラムの総仕上げの位置づけにある。

2003年、日本社会学会²他の学会が社会調査士資格認定機構を設立、その後この社会調査士資格認定機構が母体となり2008年に社会調査協会が設立された。この協会から、カリキュラムの認定を受けた大学で、必要な単位を取得、資格申請を行った後、大学卒業後に社会調査士の資格が付与される。社会調査士は「社会調査の基礎能力を有する専門家」（社会調査協会「社会調査士とは」2014.12.10最終アクセス）³とされる。カリキュラムは以下のようにっており、6科目の単位を取得する必要がある（社会調査協会「社会調査士のカリキュラム2014.12.10最終アクセス」）。

- 【A】社会調査の基本的事項に関する科目
- 【B】調査設計と実施方法に関する科目
- 【C】基本的な資料とデータの分析に関する科目
- 【D】社会調査に必要な統計学に関する科目
- 【E】量的データ解析の方法に関する科目
- 【F】質的な分析の方法に関する科目
- 【G】社会調査の実習を中心とする科目

※【E】と【F】は、どちらかを選択。

本学科では、社会調査に関する学びを学科のカリキュラムの柱の一つと位置づけ、これまで2年生の必修科目であった【A】科目、すなわち社会調査の導入科目を2014年度入学者対象のカリキュラムでは1年生の必修科目とした。上記に示す通り、社会調査実習は総仕上げの【G】科目とされ、3年生から履修できる。2014年度は、量的調査法による実習が一つ、質的調査法による実習が三つ「社会調査実習」として開講されている。

オープンキャンパスでの学科紹介では、「人間社会学科の特徴」の一つとして「『データ分析のプロ』の資格、社会調査士を取得でき」ることを以下のように説明している⁴。

- 社会の現場に直接かかわっていくフィールドワークや、自分たちが作ったアンケートによるデータの収集と分析を通して、社会調査のプロの証明である社会調査士の資格を取得できます。

- あらゆる行為がデータ化され、分析の対象となるビッグデータの時代を迎えた今、社会調査士の資格はこれからますます重視されます。
- 就職活動にも有利！

「社会調査士」の資格は、学科外の科目を履修する必要がある「教員」や「図書館司書」の資格と異なり、学科で設置している科目を修得するだけで取得できる資格としての独自性もあり、資格取得者は毎年卒業生の1/4から1/3程度に上っている。

以下では、学科としても、また学科の中心的学問分野である社会学においても重要な社会調査実習について、筆者の授業を中心にみていきたい。

II. 社会調査実習の対象—多摩のコミュニティビジネスについて

(1) 対象を選ぶ経緯

2011年度に明星大学に着任した筆者は、2012年度から社会調査実習を担当することとなった。筆者の専門分野である「労働」に関連し、かつ大学のある多摩地域に根ざし、さらにはこれから社会に出る学生たちに、真に力となるような実習にしたい。そのためにふさわしい調査対象はないものだろうか。そのように考えていた筆者の目にとまったのは、地域貢献をするビジネスを支える多摩信用金庫価値創造事業部の長島剛さんを紹介する記事であった。早速お目にかかったのが2012年3月のことである。長島さんから多摩コミュニティビジネス・ネットワークのシンポジウムを紹介され、参加した先で出会ったのが、その後調査を引き受けて下さった「調布アットホーム」の石原さん、「調布アイランド」の丸田さん、さらに「エマリコくにたち」の菱沼さんであった。

(2) コミュニティビジネスとは

コミュニティビジネスについて、細内は「地域コミュニティを基点にして、住民が主体となり、顔の見える関係の中で営まれる事業のことをいう。またコミュニティビジネスは、地域コミュニティで眠っていた労働力、ノウハウ、原材料、技術などの資源を活かし、住民が主体となって自発的に地域の問題に取り組み、やがてビジネスとして成立させていく、コミュニティの元気づくりを目的とした事業活動」であるとする（細内 2010）。また、特定非営利活動法人のコミュニティビジネスサポートセンターは「コミュニティビジネスとは、市民が主体となって、地域が抱える課題をビジネスの手法により解決し、またコミュニティの再生を通じて、その活動の利益を地域に還元するという事業の総称」であるとする。さらに「コミュニティビジネスは法人、資格を示すのではなく、『地域性・社会性+事業性・自立性』を伴った地域事業のこと（コミュニティビジネスサポートセンター [NPO 法人]「コミュニティビジネスとは」2014.12.10 最終アクセス）」を指すという指摘は重要であると思われる。実際に、コミュニティビジネスの運営主体は様々で組織形態に定まったものはない。広域関東圏コミュニティビジネス推進協議会は「地域の抱える課題を、地域住民（市民）が主体となって、ビジネスの手法を活用しつつ、それらを解決していく、一つの事業活動」（広域関東圏コミュニティビジネス推進協議会「コミュニティビジネスとは？」2014.12.10 最終アクセス）であるとする。さらに、経済産業省・関東経済産業局では「コミュニティビジネスとは、地域の課題を地域住民が主体的に、ビジネスの手法を用いて解決する取り組み」と定義している（経済産業省・関東経済産業局「コミュニティビジネスの定義」2014.12.10 最終アクセス）。以上のような定義から、地域・住民主体・ビジネス手法が共通項として見出され、関東経済産業局の定義がその要点を押さえているものと思われる。しかし、地域の課題ということに関しては、顕在化しているものと、コミュニティビジネスの対象となって初めて焦点化される課題があるということが、実習を進めるにつれ、実感できるものとなった。したがって、本論では「コミュニティビジネスとは、顕在的、潜在的な地域の課題

を地域住民が主体的に、ビジネスの手法を用いて解決する取り組み」とすることとする。以下、コミュニティビジネスについては章・節・項のタイトルに用いる以外では基本的にCBと表記する。

(3) 多摩地域のコミュニティビジネス

現在、CBを束ねる地域の団体はいろいろとある。広域関東圏コミュニティビジネス推進協議会は、1都10県⁵にまたがるCBのプラットフォームであることをコンセプトに2003年に発足した。この協議会の理事には、後に述べる多摩CBネットワークの世話人も名を連ねており、CBの推進や情報提供、交流などを行っている。他に北海道、中国地域などにも地域のCBを束ねる組織があるようである。

多摩CBネットワークは、2009年1月24日開催の「多摩CBシンポジウム（主催：多摩信用金庫・広域関東圏CB推進協議会）」の参加者から、シンポジウムだけでは物足りないと思ったゆるやかなネットワークである。会則もなく理事もないフラットでゆるやかな関係性を大事にしているという。多摩地域の活性化に取り組む任意団体で、CBを支援しており、発足当初は40人程度で活動していたが、メーリングリストやフェイスブックでつながるメンバーの数は2014年1月末で447人に達するという（長島「共助社会づくり懇談会 平成26年10月1日 資料1」2014年12月10日最終アクセス）。筆者に多摩CBシンポジウムをご紹介下さった多摩信用金庫価値創造事業部の長島剛さんもこの多摩CBネットワークの世話人のお一人である。

(4) 調査対象のCBについて

① 調布アットホーム

調布アットホームとは、CBという新しい地域参加のスタイルを調布で普及、定着させるために2010年4月1日に発足したCBの中間支援組織である。フリーライターである調布アットホーム代表の石原靖之さんが多摩のセカンドライフを取材するうちにCBに魅了され、仲間を集めて設立した。月一度の定例会「アットホームカフェ」を開催して、CBに関する情報提供や交流に努めている。また、実際に調布アットホームから生み出されたCBに「調布アイランド」や「調布・まちシネマ」などがあり、筆者の実習では各種活動で参与観察をさせていただいている。

② 調布アイランド

調布アイランドは、調布アットホームから「調布に海を！島の食材で街を元気に！」をコンセプトとして、2011年に始動したCBの一つである。調布アイランドでは、大島や新島などの伊豆諸島から、新鮮な魚介類（島魚）や明日葉などの島野菜、島焼酎やくさやなどの加工品を、調布飛行場を利用して飛行機で運び、調布市内の加盟飲食店を中心に流通させることにより、島々と調布をともに活性化させるプロジェクトを行っている。

例えば、新島から大型客船では7時間、高速ジェット船でも3時間かかるころ、調布飛行場に到着する飛行機を利用すればわずか40分で着くのである。このCBを始めたのは、丸田孝明さんというJTBを定年退職され、それと前後して調布に移り住んでこられた方である。旅行の添乗員体験から調布飛行場を使えば、伊豆諸島と調布の物流が短時間で可能であることを知っておられ、かつ「来たり者（来たりもん）」⁶だからこそ気づいた地元の隠れた宝物、調布飛行場の活かし方といえるだろう。

HPには、『調布アイランド』は物流をベースに、島々と調布、ひいては多摩エリアからの島への玄関口として、『人』と『心』、『経済』と『文化』、『市民』と『島人』との交流を推進してまいります（調布アイランドHP 2014.12.10最終アクセス）とある。2012年には一般社団法人となり、多摩信用金庫の第10回多摩グリーン賞（経営部門）の優秀賞に選出された（多摩信用金庫「ニュースリリース」2014.12.10最終アクセス）。

③ 調布まちシネマ

調布まちシネマは調布アットホームから誕生したワーキンググループ、CBで、「調布が『映画がいつもそばにあ

る街』『暮らしに映画がとけこんでいる街』になるために、市民でできることから始め、続けていくための仕組みを作ろうと活動している（調布まちシネマFB 2014.12.10 最終アクセス）。2012年に活動を開始、「調布まちシネマの日」と銘打って、ショートムービーの映画上映をした後その映画監督たちのトークショーを開催するなど、調布市内の各所で趣向をこらした映画上映を行っている。

④ エマリコくにたち

エマリコくにたちは2011年、一橋大学在学中に地域活性化の活動（横田2012）に関わった菱沼勇介さんが、勤めていた会社を辞め、国立の地に戻り仲間と始めたCBである。菱沼さんが着目したのは都市農業である。「街と真剣に向き合い、対話し、その街の課題解決をビジネスモデルへと昇華させる、日本初のコミュニティビジネスのプロフェッショナル・チーム（アンダーラインは筆者）」（エマリコくにたちHP 2014.11.15）と謳っているように、国立の地場野菜の直営店「しゅんかしゅんか」、その野菜を用いた料理を提供する「くにたち村酒場」を傘下に置く株式会社化したCBである。2012年10月からは西国分寺駅改札外で「にしこくマルシェ しゅんかしゅんか」として販売を行うなど活動の幅を広げている。

Ⅲ. 社会調査実習の実際

社会調査実習を担当するに当たり、筆者が意識したことは、本授業は社会調査士資格を取得するカリキュラムの総仕上げ、社会調査を指導する科目であると同時に、社会人基礎力を養成する体験教育にするということである。筆者自身、学部時代に鎌倉市民の文化意識を調査する社会調査実習に参加し、大きな収穫を得た。それは知らない方々にインタビューすることがとても楽しく、かつ、同じ実習の中でも相対的に多くの調査を重ねることができ、自分の適性を発見したことである。この経験を経て、筆者は報道の仕事を目指し、TBSの報道記者・ディレクターになった。就職活動においても、この経験を一つのセールスポイントとして記し、面接でも話すことができた。そして、研究者としても今日、インタビューや観察などの質的調査を中心に調査研究を行っている。自分自身のキャリアの発芽が社会調査実習にあったことを自覚しているためでもある。

(1) 2012年度の実習

2011年度に着任した筆者は2012年度の3年生とは、ほとんど面識がなかった。それでも、「社会調査、特に質的調査を会得し、もって大学における社会学の学びの一つの集大成とすること、さらには社会に巣立つ前の基礎作りとすることを目標」とし、「この目標に到達するために、積極的かつ自主的に課題を発見し、行動することが強く求められる」としたシラバスを読み、男女ちょうど半々の10人の学生が集まった。

① 質的調査の準備

社会調査実習を実施するにあたり、いくつかの準備から始めた。まず、コミュニティビジネスについての知識を共有することである。CBに関する文献を輪読し、ディスカッションをした。また、質的調査の手法、インタビューや観察、質問の作り方、メモやノートの取り方、などの講義をして実践的に練習を重ねた。ゲストスピーカーとして、調布アットホーム代表の石原さんや調布アイランド代表の丸田さんにいらしていただいたが、その時に実施する質問作成は、授業時間では不足し筆者の研究室で熱心な有志が取り組んだ。そうするうち、「一週間のうち、一番楽しみな授業だ」「今までで一番大学生らしい授業を受けている」というような声が聞かれ始めた。

② 調査の内容

具体的なフィールドワーク、参与観察は、調布アットホーム定例会参加、調布アイランドの鮮魚を調布の各店舗に配達するお手伝い、「調布のやさしい畑」における明日葉等の伊豆諸島の特産品販売のお手伝い、伊豆大島頑張れキャ

ンペーン参加、調布飛行場の運用等に関する説明会参加などで実施した。各活動で必ずメモをとり、それをすぐにまとめ活動記録を提出し、次の授業で報告しあうようにして進めていき、情報を共有した。活動記録の書き方について、筆者がコメントするほか、他の学生の記録のいいところを参考にするようになり、次第に読み応えのあるものになっていった。各自の活動記録を最低一つは最終報告書に掲載した。

インタビューに関しては、ゲストスピーカーとしていらした石原さん、丸田さんに皆で作成した質問を伺ったほか、調布アットホーム副代表の杉山裕子さんや調布市市民活動支援センターの職員の方に調布市とCBとの関係を伺った。

さらには、個人でもっと深く調査をしてみたいと希望したS君が「エマリコくにたち」にインターンとして3か月通い、許可を得て調査を行った。



調布のやさしい畑にて
調布アットホーム・調布アイランドの皆さんと
社会調査実習履修生、筆者



調布アットホームの会合、アットホームカフェで
提案する学生

③ 学生の成長の軌跡

販売の参与観察を重ねるうち、丸田さんからの呼びかけもあり、学生たちが明日葉やパッションフルーツの売り方、試食の出し方の提案を2012年8月9日の調布アットホームカフェ定例会で行った(写真右)。この時、身体にいいとは知りながらも明日葉の苦みが苦手な人もいるし、食べたことのない人もいたので、もっと小分けにして売ったらどうか、という提案もした。翌年度、明日葉の販売が小分けになっているのを確認した筆者が丸田さんに確認したところ、「学生さんの提案で(小分けにしたところ)、完売できるようになった」とニヤリ。2012年度の履修生に遅ればせながら、嬉しい報告をしたものである。

また、後期に入り、最終報告書の担当執筆箇所が決まると、担当者が自ら関係者に交渉してアポイントをとり、インタビューをしてくるようになった。手取り足取り、まさに実践躬行の体験教育を通じて、確実に成長し、「積極的かつ自主的に課題を発見し、行動」できるようになっていった。比較的引っ込み思案だった学生が、大人ばかりのアットホームカフェに一人で参加、活動記録の報告をしたときには、彼の横顔をまぶしく感じたものである。

④ S君による「エマリコくにたち」の調査

「都市農業の活性化」に着目、株式会社化し、ビジネスとしても成功しているエマリコくにたちにインターンとして3か月間入り、調査してきたS君の調査は、社会調査を指導するうえで、望ましい到達点に達したのものとして筆者自身の記憶にも残るものとなった(S 2013: 109-151)。彼は、週に3回ほど通うエマリコくにたちでの活動の報告書を丁寧に筆者に送付、彼の調査の進展は詳細に把握できた。虚心坦懐に調査を進める中で、問題意識もかたまり、観察、インタビューともに十分なデータが得られた。そのうえで、1) エマリコくにたちの活動に(彼自身を含め)

なぜハマるのか?、2) なぜエマリコくにたちはビジネスとしてうまくいっているのか?の2点について先行研究を検討しつつデータを分析したのである。中でも、印象的なのは、「情報共有」が鍵ということを見出したことであり、小集団研究として、学部生の調査研究として優れたものにまとまったといえるだろう。

⑤ 社会調査実習の成果

一年間、正味9か月ほどの社会調査実習の成果は『コミュニティビジネスの現状と課題—調布と国立の事例から—』(明星大学人文学部人間社会学科 2012年度社会調査実習(鵜沢クラス)調査報告書)として2013年3月にまとめられた。すべての学生の原稿が最低二つは署名原稿となり、就職活動の際にも「私の担当箇所はここです」と胸を張れるよう勘案した。また、公務員やJA志望の学生には調査地域や行政とCBとの関わりについて執筆するなどの配慮をした。この報告書の評判は高く、多摩信用金庫の長島さんは「こういった報告書はもらうとポイと隅にやるけど、この報告書は一気に読んでしまった、面白かった」と送付した翌日にメールをくださったり、社会調査協会の仕事を担当している学科の同僚の教員からは推奨する社会調査実習の候補として挙げたとの話を聞いた。筆者の所属する日本労働社会学会会員で、興味深い社会調査実習を指導している友人は、「(自分の報告書が)恥ずかしくなった」と言ってくれた。卒業時に、この学年の履修生の成績が総じてとてもよく、優秀な学生揃いであったことがわかったが、それにしても、原稿の添削は少ない学生でも2回、多い学生の分は数えきれず、教員学生ともに精いっぱいやった結果といえるだろう。学生生活や就活の相談に個別に訪れる学生たちはサプライズで誕生日を祝ってくれた。「人格接触による手塩にかける教育」として関わられたといえるのではないだろうか。以下は報告書の目次である(学生の著者名略)。

2012年度明星大学社会調査実習報告書(鵜沢クラス)

— コミュニティビジネスの現状と課題—調布と国立の事例から—

目 次

はじめに	鵜沢	1
第1章	調査地域の概要 — 多摩・調布 —	3
1-1	多摩地域について	3
1-2	調布について	8
1-3	調布市 ～歴史文化的考察～	14
	活動記録(フィールドノート)	28
	調布飛行場の運用等に関する説明会	
第2章	コミュニティ・ビジネスについて	34
2-1	コミュニティ・ビジネスとは	34
2-2	多摩CBとは	42
第3章	コミュニティ・ビジネスの実態① — 調布アットホーム —	45
3-1	調布アットホーム概要	45
3-2	調布アットホーム活動内容	45
3-3	調布アットホームを支える人たちについて	57
3-4	まとめ	65
	活動記録(フィールドノート)	66
	調布アットホームカフェ(6月7日)	

6月22日石原さん講義 同日石原さん講義・懇親会	
調布アットホームカフェ (8月9日)	
伊豆大島頑張れキャンペーンレジュメ (8月9日発表)	
第4章 コミュニティ・ビジネスの実態② — 調布アイランドについて —	73
4-1 調布アイランドとは	73
調布アイランドの現状 ～ 調査から見えてきたこと ～	75
4-2 配達について	75
4-3 販売について	77
4-4 丸田さんについて ～ 調布アイランド誕生秘話 ～	81
4-5 調布アイランドの課題	87
活動記録 (フィールドノート)	89
6月15日丸田さんの講義・懇親会	
7月21日販売実習 (大島特産フェア)	
伊豆大島頑張れキャンペーン企画書 (9月28日)	
配達実習 (7月12日) (10月11日)	
第5章 コミュニティビジネスの実態③ — エマリコくにたちについて —	109
5-1 調査の概要	
5-2 調査地域について	
5-3 エマリコくにたちについて	
5-4 調査の内容について 活動記録 (フィールドノート)	
5-5 調査の分析	
5-6 課題	
5-7 総括	
参考文献一覧	
第6章 まとめにかえて — コミュニティ・ビジネスの現状と課題 — 学生全員	152
おわりに 鵜沢・学生全員	164

⑥ 社会人基礎力としての成果

筆者が意識していた、社会人基礎力としての成果はどうであっただろうか。見事に10人とも就職を果たしたのである⁷。エマリコくにたちの調査を1人で行ったSくんは、社会調査実習は就活に「最強でした!」と語ってくれた。エマリコくにたちにおいて、働く人たちが「はまる」要因を「情報共有」であると「発見」したS君、第一希望の一つの会社の役員面接でその話をしたところ、社長に「素晴らしい!」と言われ、帰り道「もっと話そう」と声をかけられお昼をご一緒したという。社長さんもちょうど社員との意思疎通、情報共有を課題の一つと考えていたとのこと、彼は結局5つの会社から内定を獲得した。また、印象深いのは、調査対象の石原さんや杉山さんが地域貢献しつつ生き生きとされておられる姿に魅力を感じた学生が、かつては窓口のお姉さんに憧れていたものの、地域貢献に積極的に関わりたくて総合職で多摩信用金庫を受験、見事内定を勝ち得たことである。市役所やJAで地域に貢献する仕事に携わることになった学生もあり、社会調査実習が社会人基礎力を磨き、かつキャリアの種を見つける一助となったと本当に嬉しく思ったものである。

⑦ 課題

他方、課題も確認された。それは、社会調査にはついて回る課題ともいえるが、調査対象者の皆さんに「この人たちは何をやる人なんだ？」と怪訝に思われることである（山北 2011）。積極的な学生が、まだ種のタネの段階であったCBについて、より深く知ろうととった行動が不審に思われ、拒否的な対応を取られ対処に苦慮したこともあった。社会調査って何？ 参与観察って何？ お手伝いやボランティアと違うの？ そんな声にならないような声に耳をすませつつ、調査対象の皆さんと手探りで信頼関係を築く一年であった。

(2) 2013年度の社会調査実習

社会調査実習2年目の2013年度、メンバーは9人、筆者の3年ゼミ所属の6人に1年ゼミで面倒を見た2人、個人的には初めて接する1人という構成で、男女比は、女性3人男性6人であった。個人的にもよく知る学生たちで、実習はスムーズに進むものと楽観視していたが、予想とは相違して、課題の見つかる一年であった。

① 調査・活動内容

2012年度終わりに、調布アットホームの中のワーキンググループとして準備を始めたCBプロジェクト「調布・まちシネマ」のイベントが2013年には4回行われた。2013年度の社会調査実習では、この「調布・まちシネマ」の準備から当日の運営までお手伝いするという形で参与観察をした。

さらに、調布アットホームの分科会であるワールドカフェに学生スタッフを入れてくれないかという依頼が調布アットホームからあった。調布市柴崎在住の学生I君がおり、2年次終盤より3年生から引き継ぐ形でアットホームカフェに参加していた。実質的には彼に頼めないかという依頼であり、彼も快く引き受けた。この活動も参与観察の対象となった。

加えて、2012年度から関わらせていただいた調布アイランドでの参与観察も続けた。特に2013年度は丸田さんからのかねてからの提案で新島合宿を挙行了。伊豆大島の土砂災害が起きた年でもあり、伊豆大島応援フェアなどの販売イベントをお手伝いする機会もあった。

質的調査の基本も最低限講義したものの、CBに関する文献を輪読する時間が取れず、2012年度の報告書を読み、要約を提出するという形でのスタートであった。

② 課題と反省

第一の課題は、活動量、調査対象が多すぎたことである。「調布・まちシネマ」の活動が始動したことで、学生たちに興味を聞いてみると、ぜひ参加してみたいという。そこで調査対象に加えたが、イベントの数もそのための準備も多く、始まったばかりのイベントとして学生が内容に関与する余地も少なかった。毎回の授業においては、3本のプロジェクトそれぞれの活動の報告、連絡にかなりの時間を割くこととなった。

9月の新島合宿を実施するにあたり、コーディネーターを務めて下さった丸田さんと打ち合わせの時間を持ち、新島に関するお話も聞いた。しかし、一歩踏み込んで事前に学生たちが主体的に新島について調べることなく、せっかくの貴重な経験をあまり深められなかったことは反省点の一つである。筆者自身が新島を訪れたのが初めてであったということもあるが、8月末にあったまちシネマのイベント準備、実施に時間が取られたことも一因である。

第二の課題は、学生と教員、学生間の関係性である。9人中6人が筆者の3年ゼミ所属の学生であり、残る3人のうち2人は1年次の私のゼミ所属であった。実習が始まる前に個人的接触がないのはただ1名であった。2012年度、どの学生とも接触がなかったのに比べ、大きな違いである。「この実習は、社会に出るためのトレーニングでもあり、『仕事』として考えるように」という話もしたが、どこかに筆者に対する「慣れ」があり、「甘え」が感じられたように思われる。「人格接触による手塩にかける教育」の一環として、人間社会学科ではすべての学年で少人数制のゼミを設けている。大学教育、社会学への導入として特に1年生に対しては、筆者は個人面談をし、大学生活に慣れ楽し

く社会学を学ぶことを意識しているが、「楽しく」「優しい」先生が3年生では厳しくなったと思われたのかもしれない。初年度と同様、活動のたびに報告書作成、発表を求め、修正すべき箇所を指摘したが、報告書作成の忘れ、内容の不十分さなどが散見された。

また、学生間の関係も、授業外の諸活動への熱心さや出席率に差が出てくると、頑張っていると自覚している学生がツイッターでほかの学生についての不満を「つぶやく」ということがあり、それを見て、ほかの学生が不愉快に思い、関係性が悪くなるというような事態もあった。それぞれの言い分を聞き調整に努めたが、ゼミでも顔を合わせる仲であることもあり、4年次にもいくらか持ち越されることとなった。

2013年度で最も苦労したことは報告書作成であった。12月に行われた「調布・まちシネマ」のイベントを調査の最後とし、報告書を作成し、1月の最初の授業には第一稿を持ってくるように指導していたが、締め切りに対する意識の低さには困らされた。3月初めには印刷会社に原稿を入稿する予定であるにもかかわらず、2月後半になって、インタビューしたいと言いついたものもいる始末であった。彼女彼らの署名原稿になるのであるし、一定レベルの報告書にしたいという思いがあり、初年度同様添削を繰り返したが、特に自分のゼミの学生の修正の遅さ、不徹底さに最後には胃痛がひどくなり、点滴を打つ中、ようやく印刷会社に原稿を送るありさまであった。

③ 成果と課題克服について

このように、課題ばかりを感じた2013年度であったが、2014年12月現在、4年生になった9人のメンバー全員が就職の内定を得た。詳細を知る限り、180倍の倍率を経て第一希望に内定を得た者や、かねてからの念願であった地方自治体から内定を得た者もいた。また、業界に拘り、なかなか内定が取れず引きこもりたくないかと心配な学生がいたが、彼も粘ってしっかりと社会人へのパスポートを手にした。幸いなことに皆社会人として巣立つ準備ができたといえるだろう。さらに、卒論指導において、社会調査実習の経験者には明らかに筆力が上がったな、と思わせる学生が複数いた。それを伝えると「鍛えられましたから」と苦笑い、苦しい経験は身になったようであった。また、唯一社会調査実習履修まで少人数教育の場では接点のなかったH君は、最も熱心に質的調査を学び、力をつけた学生の一人であるが、履歴書を見せにきて社会調査実習の活動で得たことを書き、勉強の甲斐あり希望通り地元の自治体に就職が決まった。その上、卒論も報告書を活かし「コミュニティビジネスと市民協働」をテーマに書いたことを知ったのは嬉しい発見だった。

1年生、もしくは2年生から「人格接触」のあった学生たちと、満足のいく実習ができなかった経験は非常に残念で、しばらくは頭をかかえたものの、時を経て冷静に分析し、筆者のほうも慣れ親しんできた学生に、これ以上言わなくてもわかっているだろうとの甘えがあったのではないかと考えるに至った。人を育て動かす際の山本五十六の名言「やって見せ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば人は動かじ」は実践躬行の体験教育の真髄とも言えるものであろう。なじみのある学生もそうでない学生も同様に、必要とあらば嘸んで含んで繰り返し大事なことを伝え、伸ばしていきたいと思っている。

IV. まとめにかえて—今後の課題と展望

以上、人間社会学科における重要な体験教育の一つ社会調査実習について、筆者の事例を検討しつつその成果と課題を検討してきた。

2年間の経験を経て、本社会調査実習が、社会に巣立つ前の基礎作りという到達目標に一定程度達していることが実感できた。2年間の履修者19名は全員就職内定を得、授業で学んだ経験や知識を何らか活かして巣立ったあるいは巣立つようである。とある企業からきた求人メールの学生の条件に「大人と話せる学生」ということが書かれてあった。履修生が皆、概ね希望とするところに就職が叶うのは、CBという調査対象を選んだことで、多くの大人と接し、

活動に自ら参画し提案する、あるいは自分でインタビューの交渉をしたり、お礼状を書いたりというコミュニケーションを重ねることで、大人の世界に動じず、自ら自分の未来を切り開く力を身につけることができたことも一因ではないかと考える。

他方、質的調査の会得、大学の社会学の学びの集大成の一つとするという目標は、学生それぞれのレベルに応じて果たされていると言えようか。質的調査を経験することは、上記に示したように必然的にコミュニケーション力を磨くことであるということは指摘できるかもしれない。2012年度履修生のS君の事例は本人の力量、やる気、努力が何よりではあるが、指導により学部学生の社会調査として、望ましいレベルに到達しようということを示唆してくれた。また、2013年度履修生では、4年生になり自分のゼミ所属の学生の卒論を指導する過程で、社会調査実習の報告書をまとめることにより、確実に筆力、論理構成、展開力がついたと成長を感じることができた。さらに、地元自治体に就職するH君の事例は、市民の側からの地域貢献という社会調査実習での経験が卒論テーマにも結び付き、彼のキャリア形成の土台となったということで、後輩たちへのいい先例となってくれたのではないだろうか。

最後に、筆者自身2013年度の経験から、適当な調査・活動量、教員と学生、学生間の人間関係について深く考えさせられた。2014年度は、これらのことをふまえ、かつ、学生の発案をより活かせる実習にしようとして試行錯誤しつつ進めている。2015年の多摩CBネットワークのシンポジウムは、2月14日に明星大学で行われることが決定し、筆者や学生たちが成果を報告するセッションも設けられることとなった。時間的、精神的、時間的に教員にもなかなか負担の大きい科目ではあるが、気を引き締めて続けていきたい。

注

- 1 本稿は「労働分野における社会調査実習・体験教育・地域貢献の一試み—多摩地域におけるコミュニティ・ビジネスを対象として—」（鶴沢由美子）日本労働社会学会第25回大会自由論題報告（2014年10月25日）に加筆修正したものである。
- 2 日本社会学会のほか、日本教育社会学会、日本行動計量学会が設立に関わった。
- 3 なお、上位資格として専門調査士という資格がある。社会調査士資格を取得しているものが大学院において所定の単位を取得、研究論文を提出して資格を得ることもあれば、すでに社会調査の研究や実務に携わる者が論文・実績審査を経て取得する場合もある。筆者は後者にあたる。
- 4 2014年度人間社会学科オープンキャンパス用パワーポイントより引用。
- 5 1都10県とは、東京都と、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、神奈川県、新潟県、山梨県、長野県、静岡県を指す。
- 6 「来たり者（来たりもん）」とは、調布に古くから住む人々が新しく移り住んできた人を指して用いる言葉であるという（大前 2014）。
- 7 もっとも、一人卒論を書かず、退学した学生がいた。ゼミの担当教員によれば、なぜ卒業しようとしなかったはついに謎であったというが、就職に支障はなく晴れ晴れとしていたという。

引用・参考文献・資料

大前勝巳 2014.12.11「多様な働き方について」講義

（鶴沢由美子担当科目：社会関係研究Ⅳ A『職業・労働と社会』ゲストスピーカー）

経済産業省・関東経済産業局「コミュニティビジネスの定義」

（http://www.kanto.meti.go.jp/seisaku/community/index_about.html 2014.12.10 最終アクセス）

広域関東圏コミュニティビジネス推進協議会「コミュニティビジネスとは？」

(<http://www.k-cb.net/community/index.html> 2014.12.10 最終アクセス)

コミュニティビジネスサポートセンター (NPO 法人)「コミュニティビジネスとは」

(<http://www.cb-s.net/CB.html> 2014.12.10 最終アクセス)

社会調査協会「社会調査士とは」

(http://jasr.or.jp/participation/what_sr.html 2014.12.10 最終アクセス)

社会調査協会「社会調査士のカリキュラム」(http://jasr.or.jp/participation/curriculum_sr.html 2014.12.10 最終アクセス)

多摩信用金庫 2012.11.22 「ニュースリリース」

(http://www.tamashin.jp/18_pressrelease/data/20121122.pdf 2014.12.10 最終アクセス)

調布アイランド HP (<http://chofu-island.or.jp/2014.12.10> 最終アクセス)

調布コミュニティビジネス推進委員会 調布アットホーム HP

(<http://chathome.tamaliver.jp/> 2014.12.10 最終アクセス)

調布まちシネマ フェイスブック

(<https://ja-jp.facebook.com/chomacine> 2014.12.10 最終アクセス)

長島剛「共助社会づくり懇談会 平成 26 年 10 月 1 日 資料 1」

(https://www.npo-homepage.go.jp/pdf/data/report33_ikenkoukan_6_1.pdf 2014.12.10 最終アクセス)

細内信孝 2010『新版 コミュニティビジネス』学芸出版社

明星大学人間社会学科 2013『コミュニティビジネスの現状と課題 — 調布と国立の事例から —』(2012 年度社会調査実習 (鶴沢クラス) 調査報告書)

明星大学人間社会学科 2014『コミュニティビジネスの成果と課題 — 調布と新島を事例として —』(2013 年度社会調査実習 (鶴沢クラス) 調査報告書)

山北輝裕 2011『はじめての参与観察 — 現場と私をつなぐ社会学 —』ナカニシヤ出版

横田雅弘 2012『学生まちづくり — の奇跡 — 国立発!一橋大生のコミュニティ・ビジネス』菱沼勇介 (監修)・田中えり子・林大樹 (編集) 学文社